
コーヒーを紙カップに注いで

谷之雄二

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コーヒーを紙コップに注いで

【Nコード】

N8719R

【作者名】

谷之雄二

【あらすじ】

二つ持ったコーヒーの片方を、僕は彼女にそっと手渡した。

若者は気になっていた。

「……………」

想像していたよりも、少女は小柄で華奢な体をしていた。身の丈は若者の頭一つ分は低いだろうか。遠目からは分からなかったが、近づくにつれてその背の低さは一目瞭然だった。

「……………あ」

「え……………」

若者の唐突な声と水面が弾かれる音、そして少女の呆然とした声が漏れるのはほぼ同時だった。湖の上をすいすい泳いでいた白鳥が、突然餌も見つけたのか、思い立ったように水面から飛び立ったせいだった。

若者は失敗したと、自分の失態を後悔していた。

「……………」

声に気づいた彼女が、振り返ったままじっとこちらを見つめてきていた。その顔は、端から見ても分かるほどに不審げに歪んでいる。ただ、そんな彼女の引き込まれるような吊りあがった黒曜石の瞳は、それでもなお綺麗だと思った。

「えっと……………その……………な、なにしてた、んですか？」

「……………」

もちろん、答えるはずもなかった。

不穏の色を湛える瞳は、まるで鳥でも観察するかのようじつと若者を見据えていた。ひよろつとした印象を受ける、小枝のような男だ。とうてい、力強さとは皆無の場所で生きているはずである。服のセンスは上々といったところか。決して、悪くはない。ただ……………終始放つオーラにも似たものが、『ダサイ』という言葉で女性の心に抱かせるのは、残念としか言いようがなかった。

若者もそんな自分のことはとうに自己分析済みなのか、諦めたよ

うにその場を立ち去ろうとするが、

「……………鳥、見たの」

「へ？ と、とり…………？」

「そう、さっきの鳥。でも、飛んでっちゃった」

表情は一切変えず、淡々と事実を告げるように少女は答えた。声をかけたのは若者であるが、返事があったのは意外だったのだろう。鳩が豆鉄砲でも喰らったかのような顔で、間の抜けたキャッチボールしかできなかった。

「ねえ、それ、なに？」

「あ、えーと…………コ、コーヒー」

手に持っていた二つの紙カップを掲げてみせて、若者はなんとか場を保とうと愛想笑いを浮かべた。がちがちに固まった頬肉で作ったぎこちない笑みに、少女は案山子でも相手にしているかのような冷めた目を向けるだけだった。

「そ、その…………飲みます？」

こくり、と少しだけ心を許した親しげな目で少女は頷いた。

そつと渡されたコーヒーの紙カップを両手で持って、その温かさをじんわりと噛み締める。季節は冬だ。繋服の下は何枚かの衣服を重ねており、若者もまた、温かそうな緑のジャンパーを着込んでいた。

どうして、こうしていま、二人でいるのだろうか？

枝のような若者は、小柄な背中を見ていたときには想像もしていなかった展開に半ば思考が上手く回らなかった。会話の糸口を探すも見つけることはできず、二人で並んでじつと宙と水面とに視線を動かしてだんまりを決めこむ。コーヒーを持ってきたことは、正解だった。こうしていれば、時間が過ぎるのを少しは違和感なく傍観していられる。

「…………さっむいねー」

白い息を噛み締めていたとき、ツリ目の少女は弾くように声を張った。

「そ、そうですね」

そもそも弱気な若者は強い口調に慣れておらず、そんな当たり障りのない言葉しか口にできなかった。幸いなのは、そんなことしたことないとばかりに少女がつけはなしたような口調を続けたことだ。

「ねえ、あんた何年？」

「二回生……法学科」

「なんだ、いっしょじゃん……タメ口でいいよ」

ときどき唇から白い息を吐き出しながら、少女は面白くもなさそうに会話を続けた。

なんでも、つい最近、彼氏と別れたらしい。やれそのときの彼氏はこんなときこうしてくれなかっただ、人の気持ちを考えろだ、拳句には最近の日本男児事情にまで苦言を呈する始末である。ゴミでも捨てるかのように出るわ出るわの文句の数々であった。気持ちをそのまま吐き捨てる彼女は若者の知らない事情をどんどん持ち出す――不思議と、それが嫌な気持ちはしなかった。むしろ、その会話は楽しいとさえ思えた。

いつの間にか、コーヒーはすでに半分以上飲み進んでいた。それほど、時間は夢中になっている間に通り過ぎていたのだ。

「……んで、名前は？」

「へ？」

「へ？　じゃなくて、名前。あんたの名前。なんて呼んだらいいかわかんないじゃん」

怒っているようなキツイ口調で質問してくる少女は、鋭い目で若者を覗き込むように見てきた。嘘も偽りもなさそうな黒曜石の瞳がじっと自分の心を見ているようで、直視に羞恥が耐え切れなくなった若者は顔ごと視線を逸らした。

とは言え、返事を返さないつもりはない。詰め寄るようにして見つめ続ける少女に自分の名前を伝えようとする――

「あっ!？」

視線から逃れようと慌てたせいだろう。若者の手からコーヒーが零れ落ちた。時間が経ってぬるくなっていたのは幸いだったが、シヤツには染みが一気に広がる。

「つたくもう、なにやってるのよ」

思わぬ出来事にあたふたとする若者へと歩み寄って、少女は自分のハンカチで染みを拭ってやった。

「ちょ、ちょ……!？」

「いいから、じっとしてなさい」

それで染みが消えるわけではなかったが、ひとまず水気は拭き取ることができる。パンパンと手馴れた様子で叩くよう拭いて、少女がようやく離れようとした。

「あ……」

突風が襲った。

冬の強風である。冷たい風が二人を叩くように吹き、少女の手からハンカチを奪い去っていった。ハンカチは、湖の横の木橋へと落ちる。

少女に告げることもなく、思わず若者はそれを追った。自分の不手際の後始末をしていたからこそ起こった事態である。取りに行くのは当然であるが、そうでなくとも、わざわざ少女に取りに行かせるような手間をかけさせたくはなかった。

「……あった」

そう長く探すこともなく、風に飛ばされただけのハンカチはすぐに見つかった。

それを拾い上げて、元になっていた場所へと戻ってくると、そこに少女の姿はなく――最前、小柄な背中を紙コップ二つを両手に見つめていた場所から声が降りかかった。

「ねえ」

はっと顔を上げると、悪戯めいた笑みの丸顔が見下ろしていた。

「それ、持っというてよ。また会ったときに返してくれてばいいからさ。じゃ、あたしこれから講義なんだ。じゃね」

片手をさつと振って、小柄な背中が大学に備えられた英国式庭園から去っていった。

狐か狸かにでも化かされただろうか。そんな馬鹿らしい想像を巡らせながら、呆気にとられた顔で少女の後を見つめ、やがてハンカチへと目を下ろした。

「……洗濯しろってことかな」

白と黒のチェック模様のハンカチは、細かな草のはぎれや吸い取ったコーヒーの染みで汚れていた。

(後書き)

自分の大学をモチーフに書いていました。
妄想が入ってる気がするなあ……。。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8719r/>

コーヒーを紙コップに注いで

2011年3月23日21時10分発行